

# 入門期における古典の取扱いについて

畑 実・鈴木洋一郎・酒井為久・佐藤クニ子

## I

われわれは、昨年度において古典の入門期の想定や生徒の学習の実態を調査した結果に基づき、従来の古典指導を反省しながらその研究の一部をまとめることができた。しかし中学3年を入門期と想定しての指導であったために、義務教育の完成学年が古典入門期ともなり、また新指導要領に示されている目標からも越えるという矛盾をも感ずるに至った。さらに高校において国語乙、または古典乙を取り扱うとき、中・高の一貫した古典教育が行われていないという現状もやはり認めざるを得なくなったのである。中・高を同じ教官で指導する本校においては以上の矛盾や障害は少ないのであるが、高校における古典教育を問題にするときは、入門期を1年の2学期までに限って指導することとした。以下はその実践報告の概要である。

## II

### (1) 研究の概要

すべて学習計画は生徒の学力の実態を無視しては考えられない。われわれは昨年、予め教材（生徒が使用する教科書）における学習困難点を考察してその結果を発表した。（本校紀要第6集）。更に今年度の研究においては、いずれも具体的な項目を取りあげて生徒の学習効果の実態を把握しようとし、この調査は次の3段階に分けて行った。

1. 中学卒業時における古典読解力の調査
2. 入門期における漢文学習困難点の調査
3. 文法における指導法の比較の調査

### (2) 調査の経過と結果の考察

——中学卒業時における古典読解力の調査——

1. 時期 昭和36年度本校の進学適性検査のとき
2. 対象 本校受験生全員 234
3. 方法 進適問題に古文を課し、その読解力を調査しうるように考慮する。問題は下記の通り。

次の文を読んで、下の問に答えなさい。

これも今は昔、あなかの児の比叡の山へ登りたりけ

るが、桜のめでたく咲きたりけるに風の烈しく吹きけるを見て、この児のさめざめと泣きけるを見て、僧のやはら寄りて、「などかう泣かせ給ふ。この花の散るを惜しう覚えさせ給ふか。桜は、はかなきものにて、かく程なくうつろひ候ふなり。されどもさのみさぶらふ。」と慰めければ、「桜の散らんはあながちにいかがせん。苦しからず。わが父の作りたる麦の花散りて、実の入らざらん、思ふがわびしき。」といひてさくりあげてよよと泣きにけり。

（注）やはら…そっと など…どうして あながちにいかがせん…（花は散っても）それは無理にどうしましょう。 苦しからず…（しかたがないことで）さしつかえありません。 わびし…悲しい さくりあぐ…しゃくりあげる。

- (1) 次の文の解釈として、正しいものを下から選んで、記号で答えなさい。

桜ははかなきものにて、かく程なくうつろひ候ふなり。されどもさのみさぶらふ。

イ. 桜はかわいそうなもので直ちに色があせてしまう。しかし花だけは残っております。

ロ. 桜はたよりない花で、このようにすぐ散ってしまう。しかしそれだけのことです。

ハ. 桜はかわいい花で、このようにしだいに色が違ってゆきます。それだからよいのです。

ニ. 桜は美しいものだが、やがて散ってしまう。しかし桜の実だけは残っております。

- (2) この児はなぜおいおいと泣いたのですか。その理由の正しいものを下から選んで、記号で答えなさい。

イ. いなかの麦の花が散って実のらないのを悲しんで、

ロ. 風の烈しく吹いて桜の大木が倒れそうでこわくなって、

ハ. いなかの父に別れて来たばかりでなんとなくさびしくなって、

ニ. 美しく咲いている桜の花がこのようにすぐ散るので、

- (3) 次の文中には、現代かなづかいによると書きなお

入門期における古典の取扱いについて

す「かな」があります。その中から2つを選び、そのなおした「かな」を書き入れなさい。

僧のやはら寄てなどかう泣かせ給ふ。

- (4) 上の文章は「宇治拾遺物語」の中のものであるが、この作品について次の中から正しいものを1つ選んで、記号で答えなさい。

- イ. 奈良時代の国史である。  
ロ. 鎌倉時代の説話である。  
ハ. 江戸時代の随筆である。  
ニ. 明治時代の小説である。

——入門期における漢文学習困難点の調査——

1. 時期 第1学期中間テスト直後
2. 対象 高校1年全員
3. 方法 漢文の答案を返した後、指導をしつつ自己の成績から学習を反省させ、印象新しいうちに調査する。調査用紙は次の通りである。

漢文学習の困難点

第1学期の中間テストがすんでその成績のできぐあいを考え、いろいろ学習上の困難点がわかって来たと思う。次にあける困難点についてその困難度を4, 3, 2, 1の数字で答えよ。(4…非常にむずかしい, 3…むずかしい, 2…ふつう, 1…不明)

イ. 漢 字

教科書中の漢字には、当用漢字以外のものや、また旧字体のものが多くて、それが学習に困難を感じさせているか。(上段の注で大体わかる場合が多いが。)

ロ. 独特の漢字

漢文には、その文章構成上独特の漢字がある。不読文字、再読文字……など、これらの漢字の取り扱いがむずかしいか。

ハ. 返 り 点

- a. 読む順序を示す符号に慣れて、すらすらと読むのがむずかしいか。
- b. 白文と書き下し文(仮名まじりの国文)とを対照しながら返り点をつけるのは難しいか。

ニ. 送 り が な

- a. 送りがなには一定の法則があるが、入門期においては読みさえすればよく、厳密に注意しない。しかしそれでも送りがなをつけることは難しいか
- b. 送りがなには十分に慣れない「歴史的かなづかい」を用いる。そのために意味をつかむのはむずかしいか。…① また送りがなを書くのもむずかしいか。…②

ホ. 漢 文 体

- a. 漢文は古文と同様に文語体であるため、読みな

れないので困難を感じているか。

- b. またその独特な口調はその理解(解釈)に困難を感じているか。

——文法における指導法の比較の調査——

1. 調査時期 第2学期末テスト
2. 調査対象 高1全員
3. 調査方法 A B 2組を系統的な品詞論と機能的な文章論とに指導の方法を変えて実施して、その効果を同一の問題を中心にしてまとめ、また更にB組には文章論的な解釈問題を与えて調査した。以下その問題である。

1. 次の文を読んで問に答えよ。

後徳大寺のおとどの、寝殿に、<sup>(イ)</sup>鶯ゐさせじとて、<sup>(ロ)</sup>縄を張られたりけるを、西行が見て、「鶯のゐたらにこそ。」とて、<sup>(ハ)</sup>その後は参らざりけると聞き侍るに、<sup>(ニ)</sup>綾小路の宮のおはします小坂殿の棟に、<sup>(ホ)</sup>いつぞや縄を引かれたりしかば、<sup>(ヘ)</sup>かのためし思ひ出でられ侍りしに、「まことや、鳥のむれゐて、池の蛙ととりければ、御覧じ悲しませ給ひてなん。」と人の語りしこそ、<sup>(オ)</sup>さてはいみじくこそと覚えしか。徳大寺にもいかなるゆゑか侍りけん。

- (1) 傍線(イ)～(ヘ)についてそれぞれ主語を書け。

(イ)	(ロ)	(ハ)	(ニ)	(ホ)	(ヘ)
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- (2) 傍線——A, B, Cを口語になおせ。

A…… B…… C……

また、A, B, Cの中から助動詞を抜き出して、意味と活用形を書け。

助動詞								
意 味								
活用形								

2. 次の文を読んで、問に答えよ。

雪のおもしろう降りたりしあした、人のがり言ふべきことありてふみをやるとて、雪のこと何とも言はざりし返りごとに、この雪いかが見ると一筆のたまはせぬほどのひがひがしからん人のおほせらるること聞き入るべきかは。返すくちをしきみ心なりと言ひたりしこそをかしかりしか。今はなき人なればかばかりのことも忘れがたし。

- (1) 次のことばの動作の主は誰であるか。

イ. 「この雪いかが見る」の「見る」

( )

ロ. 「何とも言はざりし返りごと」の「言はざりし」

( )

ハ。「聞き入るべきかは」の「聞き入る」

( )

- (2) 右の文で会話体の文で「 」にはいる部分があるが、どこからどこまでか。その初めのことばと最後のことばをそれぞれ3字書け。

(『 ……から 』)

- (3) 敬語法、係結、婉曲語法について次の問に答えよ  
イ. 敬語には、名詞に接頭語をつけて表わす方法…

①と 敬語の意味をもつ用言(動詞)…②と 用言(動詞)に尊敬の助動詞をつけるもの③とある。

④⑤⑥をそれぞれ1つずつ文中から選んで書け。

① ② ③

ロ. 文中にある「係結」の部分抜き出し、また「係結」をとった文に直してみよ。

(例) 木の葉ぞ流るる。→木の葉流る。

( ) → ( )

ハ. ことを断定しないで柔らかく、また遠まわしに言う「 …であるような」という意味をもつ(婉曲の)ことばを挙げ、その部分の解釈をせよ。

原文( ) 解釈→( )

- (4) この文は過去を回想しているものだが、これは2つの助動詞が用いられているためである。その助動詞を書け。

イ. ロ.

- (5) 「今はなき人」はどんな人と作者が思っているのか、次にあげたことばから1つ選んで記号で答えよ。

イ. 手紙をあまり書かない人 ロ. つむじ曲がり

の人 ハ. 奥ゆかしい人 ニ. 無風流な人

ホ. くやしい性質の人 ヘ. 学問ある人 ( )

- (6) 現代語と同じことばで意味だけが異なるものを名詞1つ、形容詞1つ書きその意味を書け。

名詞 形容詞

### (3) 調査の結果

#### Ⅰの調査(◎が正解) 一進適の問題一

項目	語句の解釈	文意の理解	かなづかい	文学史
選択肢				
イ	16	◎ 164 70%	ふ…183	50
ロ	◎ 57	8	は…124	◎ 162 62%
ハ	13	9	か…79	19
ニ	147	52		2

#### 1. 語句の解釈について

正答は◎で24%の正答率を示している。誤答の多い◎は過半数である。これは単語の意味の不明にも原因があるが、ゝはかなしゝを「美しい」とするのは「桜

は美しい」という既成概念からであろうし、文の意味を十分に理解していないためとも考えられる。また「さのみ」を「さくらの実」と誤ったのは音通のためであろう。「さ」という副詞の取扱いが難しいのであるが、文の前後をよく読んでみるとわかってくる語である。要するに文の筋を十分に把握して解釈してゆくという態度がつけられてほしい。

#### 2. 文意の理解について

正答は④で70%の正答率である。成績は大体よいのであるが、誤答⑤に14近くあるのは注目される。童のことばに注意したり、また文の中心箇所を理解が不徹底のためであろう。

#### 3. かなづかいについて

完全に2つできているものが178名の70%である。「給ふ」「やはら」のような語中・語尾音は注意して直すが、「かう」のような語頭音に注意がすくないように思う。

#### 4. 文学史について

宇治拾遺物語を文章の形式や内容から判断したり、またその時代を知る問題であるが、62%の正答率である。誤答①に14あったのは「国史」の意味を十分理解していないためであろう。

#### (ま と め)

これらの成績から考えてみると、(1)の問題を除いては、60~70%の正答率を挙げているので、この種の古文の理解は普通の成績であると思われるが、文中の単語の意味を文意に即して理解してゆくことは不十分で、この点特に高校の古典学習に於て考えさせられるものがあり、辞書の使用には慣れるように指導する必要性を痛感する。

#### Ⅱの調査 一漢文の困難点一

古典入門期において接する漢文の困難さは大きいものがある。外国語としての構文をもつ漢文を日本古典の中に定位させて指導することは今後の課題であるが、この観点から次の2点に注意して授業を進めることとした。

- 漢文法をわかり易く説明するため、系統論的には相容れないが、既習の英語などと統辞論上から比較してゆくことは生徒に興味をつながせることができる。
- 日本の古典との関係や諸記号(訓点)や歴史的かなづかいに慣れるようにする。

	項目	非常に困難	困難	普通	不明
漢字	字体・字形	17	52	20	0
	独特の字	32	42	22	0

入門期における古典の取扱いについて

	項 目	非常に 困 難	困 難	普 通	不 明
返り点	読 み 方	7	36	52	1
	つ け 方	24	44	26	2
送り点 がな	つ け 方	8	50	25	3
	かなづかい	1	11	47	25
文 体	読 み	4	40	40	1
	解 釈	7	50	25	4

1. 漢字について

漢文には当用漢字以外のものやまた旧字体のものが多く、生徒の70%までは困難を感じている。また漢文独特の用字には更に多く80%が難しいとしている。漢文学習が古典教育の1つとして読解してゆく場合は専門教育へ進むなら別として、教科書には当用漢字を使用してもよいと思う。現在国語乙の教科書は殆ど全部漢字には考慮を払っているのだから。

2. 読み方について

返り点に慣れるに従って読めるようになっていくし、かなづかいもそれほど不便を感じない。ただ返り点の法則を知り、書き下し文を見ながら漢文に訓点をつけたりすることはむずかしい。この困難さが生徒にある限り古典として漢文を学習することは十分に果されないと思う。

(ま と め)

古典の入門期で接する多くの教材は和漢混交文の説話物語であるから、その用語や文体が漢文体に類似している点に注意してゆく必要がある。また漢文学習においては、正しい朗読が理解に深めるから、この指導は繰返し要求せられるものである。

Ⅲ の 調 査 一文法の問題一

古典読解、特にその入門期において文法学習の占める意義は大きい。現在週1時間の国語乙の中において文法の時間を特設することはむずかしい。しかし今まで次のような計画のもとに文法の指導を試みて来た。  
第1学期 文章中で文法的に重要な単語の品詞論的な説明をして文法意識を高めてゆく。即ち品詞論は主として自立語について既習の口語文法と比較しつつ

まとめ、また助動詞・助詞などの必要なものについても触れさせてゆくのである。

第2学期 品詞論でいうと助動詞の項から始まる時期であり、文法学習としては最も重要なときである。文法指導の方法を考えるために、品詞論のクラスと文章論のクラスとに分けて次のように実施した。

即ちA組は文法のテキストを用いて、助動詞中でも比較的重要なものを接続、活用、意義と指導し練習問題で力をつけることとした。B組はテキストを用いず、国語乙の徒然草を読みながら、次のようなことを説明しながら文中において演練を重ねた。

イ. 主語・述語・修飾語の関係——文の組み立て (特に主語の発見について)

ロ. 単文・複文・重文——文の種類分け、また係結を中心として分ける佐伯博士の次の分類も参考にする。(感動文・希望文・疑問文・平叙文)

ハ. 諸語法——省略、敬語、婉曲、強勢(係結)

以上の指導の効果を前記のようなテストによって調査した。その結果は次のようである。

(問1) (A・B組共通)

主述関係 (主語の発見)	問題	正 答		誤 答	
		A	B	数	多かった例(数)
	1	30	36	32	寝 殿 (9)
	2	20	26	52	鳶 (14)
	3	4	5	89	おとど (7)
	4	1	1	96	西 行 (12)
	5	15	14	69	おとど (7)
	6	6	6	86	
解 釈	A	29	32		
	B	37	32	16	過去のみ……12 尊敬のみ……4
	C	6	4	49	過去のみ……7 推定のみ……42

助動詞の知識・理解	べき	45	47		A	B	
	れ	39	31	かる	0	17	
	たり	46	27	し	6	15	「しか」の「し」
	しか	39	45	ん	7	10	
	けん	39	22	なる	7	8	

(問2) (B組のみ)

問題番号	(1)			(2)	(3)のイ				(3)のロ	(3)のハ	(4)				(5)				(6)
	主語の発見			会話	敬 語				係結	婉曲	過去・伝聞				解 釈				
	イ	ロ	ハ		イ	A	B	ハ			し	しか	き	たり	内容	名あした	詞ふみ	形容詞	おもしろし
正 答	19	37	36	37	21	19	9	35	15	26	22	6	7	37	26	23	19		30
誤 答 (不能)	30	12	13	12	14 (14)	12 (9)	5 (9)	25 (9)	14 (9)			(3)			23	(9)			(7)

(問1)について

- 主語の発見(主述関係を考える)問題においては、述語に対して主語と修飾語の理解が不十分で、1・6に誤答の多いのが目立っている。また5のように主格をつくる格助詞「の」にも不注意。「侍り」が謙譲の意味があって自分(作者)に関係のあることも知っていない。そのために「られ」を自発の意味に考えている。A・B両組を比較すると正答に顕著な差は認められないが文章論を中心にやってB組がよかった。
- 語句の文法的解釈をする第2問の答にもA・Bの多くの差はない。ただ助動詞が2つ重なる場合の解釈は不十分。「けん」を単なる推量の意味としたものが多く、「侍らん」と同じく取扱ったのであろう。
- 助動詞の形態的理解は品詞論をやったA組は活用もよく練習していて正答が多かった。苦しかるのような活用語尾を助動詞と誤ったり、けんを2つの単語と誤ったのはB組に多いが、反対に係結を学習したためか「しか」については正答も多かったのは注意してよいと思う。

(問2)について ( )の数字は誤答数

手紙を書いた人(作者)と返事をよこした人(今は亡き人)との立場やまたそれぞれの述語との呼応を考えてゆく問題である。

- (1)主語の発見、「作者が……」「先方の人が……」などと述語とを結びつければわかるが、文中に先方の手紙文が挿入されているのでよく読まないと反対になってしまう。
- (2)会話文を終りを「……しか」とした誤答が多い。
- (3)語法のうち、敬語、係結、婉曲の3つを挙げたが、敬語には題意の誤解が多かった。しかし、イで「人のかり」が(4)、ロでは「たまはす」(問題文ののたまはすの誤読)などがあつた。また係結は、文の終止が已然形から終止形にするのであるが連体形による係結の類推から「し」にしたり(10)、「しか」という過去の助動詞に注意せず、「現在形」の「をかしかり」と終止したものもあつた(8)。係結と活用

が十分に理解されていなかった。婉曲についても文中で説明していたが、反語の「かは」(9)、「ほどの」(3)などを挙げたものがあつた。

(4)過去の助動詞は大体よかった。

(5)・(6)解釈について、「先方の人」がらを内容から読みとるものであるが、二無風流な人が(11)、ロとホとが各(5)、半数に近い誤答があつたのは、「ひかひがし」の意味を「先方の人」からの手紙文として読みかつその語の意味が十分でなかったためであろう。

(ま と め)

以上の調査からわかつたことは、まず主語と述語との関係を十分に理解させるようにしながら、文脈に即した文の成分を考えさせることである。次に主要な助動詞の活用はこれと並行して練習することである。接続については寧ろ第2にしてもよいと思う。全般に通じては題意の把握を十分指導することである。婉曲と反語のちがいがわからなかったり、また文法上の諸用語についてはその基礎(文法の入門)においては具体的に例をあげて厳密に指導することを痛感している。

Ⅲ

われわれは指導した結果の一端を以上の調査で明らかにしたのであるが、その具体的な方法は今後考究されなければならないと思う。そしてこの方法の不備な点を反省してまた新しい調査を考えていくつもりである。更に次のような順序で研究を進めたいと予定している。

イ. 入学期における古典読解力の調査

古典解釈上の困難点とその分析

ロ. 漢文と古文の読み方について

ハ. 古典乙における文法指導のあり方

◦作品中心の解釈文法

◦品詞論から始める文法指導の反省と文章指導からの文法の学習

特に次年度においてはこの中で、文法中心による古典指導法に研究の主題をおきたいと思っている。